芸術と哲学をめぐる断想

佐　藤　瑠　威
（別府大学教授）

人は、特に芸術家は、芸術作品や芸術行為にいかなる意味をみているのであろうか。人間が自分の行うことに対して反省的な態度をとり、その行為や存在の意味を問うのは、一定の年齢に達した個人や一定の文化段階に達した社会にしばしば生じることである。それはヨーロッパにおいて特に著しい。

哲学は存在するもの全体についての考察であるが、それはとりわけ人間の行為と存在についての反省的思考である。すべての存在について、特に人間の存在と行為についての徹底した反省的批判的思考としての哲学という独特な思考の形態が古代ギリシアに生まれ、連綿と続く伝統となったことはヨーロッパ文化の際立った特質を示すものである。

哲学を文化の中心にもつヨーロッパにおいては、人間の素朴な態度や行為を評価するという価値観はほとんどないと思われる。何を行うにせよ、自らの行うことを意識し、その行為の意味を問うことが文化的伝統となっているからである。

もちろん、人間は最初から意識的反省的に行為するわけではないし、意識的反省的な態度が常によりよい結果を生みだすことにつながるわけでもない。人間は誰しも素朴で無邪気な幼少期から人生を歩んでゆくものであるし、子どもから大人への過程は、単純で幼稚な段階から考え深い大人への成長の過程でもあれば、純真でまっすぐな子どもから人生を計算づくで生きる大人への堕落の過程でもありうる。意識的であることが効果をねらった計算高さとなったり、行為の意味を問うことが自分の行為を自己欺瞞的に正当化美化しながら生きる退廃を生むことになる場合もある。素朴な自然らしさを失うことが文化の堕落となることもあるのである。

人間の行為は、大抵の場合、生活の必要によって始まるか、あるいは遊戯として始まるように思われる。「好きこそ物の上手なれ」というごとく、それを行うことが楽しいから人間は熱中するのであり、そして熱中する中で上達していくのである。芸術にしろ学問にしろ、最初はそれを行うこと自体が楽しいのでやるという段階がある。あるいはそうあることが望ましい。楽しいからするという始まりをもたないものを長く続けたり、そこからすぐれたものを生みだすことは難しい。しかし逆に、何かを行う過程においてそれを行う意味を問うことがなければ、やはり本当にすぐれたものを生みだすには至らないだろう。自分の行うことの意味を問い続けることによってはじめて他者や社会にとって、そして時代を越えて意味のあることをなしえるからである。それは人間のもっとも自由な行為の条件であり、こうした人間の態度からこそすぐれた文化が形成されるのだと思われる。

学問にしろ芸術にしろ、ヨーロッパ文化の根底には常に自分の行為を意識し、自分の行うことの意味を問い続けてゆく態度があり、そのことがヨーロッパ文化の自由性を基礎づけている。それはあらゆる文化の根底に哲学があることを意味している。

十九世紀の歴史家・美術史家ブルクハルトは、古代ギリシア文化の偉大さを、とりわけそれが自由な文化であったこと、すなわち権力によって強制されたものでもなければ、たんなる実用性や功利性の道具でもなく、純粋な知識愛にもとづく学問や美の理想を追求する芸術を生みだしたことにみている。自由な精神による自由な学問や自由な芸術、古代ギリシアに始まるヨーロッパ文化のもっとも貴重な伝統をなすものはここにある。

真理と自由を建学の精神として文学部の中に創設された美学美術史学科＝芸術文化学科は、私の眼にはまさに自由な精神による自由な芸術、自由な文化の形成への道を歩んできたように思われる。今後もこの道をさらにより高い頂にむかって進んでいくことを期待し、またいくらかでも寄与したいと願っている。